日文教育資料［道徳］

どうとくのひろば

No. 36

こころのひろば

沖縄の歴史と文化を育んだ
「肝心」が人と人、未来をつなぐ
［崎原 真弓］…… 2

特別寄稿

道徳科における
ICT と道徳ノートの活用
［戸上 理子］…… 6

見てわかる！ 道徳

「真理の探究」（小学校）
「真理の探究、創造」（中学校）
「勤労」（中学校）
［越智 貢、上村 崇、奥田 秀巳］…… 8

実践事例【中学校 2 年】

国際社会に生きる
日本人としての自覚を育てる
［磯 公啓、島 恒生］……10

こんなコト、聞いてみました！

教材分析、どんなふうに
進めていますか？
［三原 一朗、大内 芙美香］……14

地球の仲間からのメッセージ

コウモリ
［長瀬 健二郎］……15

日文の Webサイト

日 文

※本冊子掲載二次元コードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

心が動く、その先へ。
日本文教出版

こころのひろば

崎原 真弓

Profile

バスガイド
てぃーだ観光株式会社　取締役

沖縄県久米島に生まれ育ち、30年以上の経歴を誇るスーパーバスガイド。三線や島唄、カチャーシーなどの実演を交えた型破りなガイドスタイルで、沖縄の歴史と文化を伝える。全国で講演も行っている。

【てぃーだ観光】
https://tiida-kanko.com/

沖縄の歴史と文化を育んだ「肝心」が人と人、未来をつなぐ

関連するSDGs目標

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
11 住み続けられるまちづくりを
16 平和と公正をすべての人に
17 パートナーシップで目標を達成しよう

型にはまったマニュアルガイドではなく、バスの中で実際に三線や舞踊、民謡、琉球空手などを披露することで、共に楽しみ、共感してもらう……。そんなガイドを身上とする崎原さんに、沖縄の歴史と文化の土台となる心のあり方、「肝心」について語っていただきました。

沖縄の歴史と文化を伝えるために、自分に何ができるのか。そう考えた崎原さんは、あらためて沖縄のことを学び直し、みんなで楽しめて共感できる、型破りなガイドスタイルをつくり上げました。さらに、戦争体験者からの聞き取りをもとに沖縄戦の話も取り入れ、平和と命の尊さを伝え続けています。

沖縄で大切にされている「肝心」について教えてください。

「肝心」はウチナーグチ（沖縄の方言）で、思いやりや真心など、優しく豊かな心のあり方を表す言葉です。小さい頃からさまざまな場面で言い聞かされていたなじみ深いものでしたが、その意味を深く考えるという感覚はありませんでした。しかし、ガイドを続けながら自分の中で深く考える機会があり、沖縄の歴史や文化をきちんと調べて学び直したんです。その過程で、琉球王国を代表する文人、程順則の存在を知りました。彼は江戸時代に、人として生きるうえで守るべき6つの教え「六諭衍義」を、一般庶民にも伝わりやすいようにと歌にして広めています。生きていくうえで大切にしなければならないのは心のあり方であるということをあらためて感じ、祖父母や両親からの「肝心」の教えにつながった気がしました。深く考えなければ理解もできなかったでしょうが、人に伝える仕事をしているおかげで、そこまでたどり着けたのだと思っています。

崎原さんの生まれ故郷である久米島の風景

琉球舞踊の中でも、色鮮やかな紅型の着物をまとって踊る女踊「四つ竹」は有名。

三線は沖縄に伝わる弦楽器で、島歌の伴奏楽器として広く普及した。

ガイド中に「肝心」をどのように伝えているのでしょうか？

「肝心」というのは奥が深く、言葉だけでは伝わらないので、歌で、三線で、沖縄の踊り「カチャーシー」や身振り手振りで、実際に感じてもらいながら伝えています。例えば、「いーやーさーさー」と投げかけ、「はーいーやー」と返してもらいます。そうするとお客様も笑顔になり声がひとつになって、どんどん気持ちが高まっていくんです。そのように調和の心を伝え、「ゆいまーる」という言葉につなげます。みんなで助け合うという意味で、「ゆい（結い、協働）」は「肝心」でもあるんです。ゆいの心をつないでみんなで大きな輪を作っていこう。それが現代の「ゆいまーる」です。説明には手振りも交えます。「右手を出して『はいさい』、左手を出して『でぃーさい』、その手で輪を作りましょう。その手は戦争をする手ではありません、人を殺めるための手でもありません、人を助けるための手なんです。『はいさい、でぃーさい、ゆいまーる♪』」と、どんどん歌になっていきます。さらに歌うように節をつけて続けます。「心をかき混ぜていきましょう、こねてこねてかき混ぜて、『ゆいまーる』の心を広げていきましょう。」と、カチャーシーを踊ります。そうすると、「ゆいの心をかき混ぜることで広がり、大きな輪につながっていくんだ。」「『ゆいまーる』とは、『肝心』とはそういうことなんだ。」と共感してもらえるんです。

大きな輪をつくって「ゆいまーる」

こねてかき混ぜる踊り「カチャーシー」

そして、沖縄の歴史と文化を表す2つの言葉を伝えます。1つ目は、「肝心」を育むために大切な「ぬちどぅたから」。命こそ宝、かけがえのないものだという意味です。その命は、お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃん、ひいおじいちゃんひいおばあちゃん、たくさんのご先祖様から受け継がれた命。過去に起こった悲惨な戦争を生き抜いてくれたからこそ、皆さんの命へつながっているんです。戦争だけでなく、自然災害をはじめとするあらゆる困難や苦しみを乗り越えて、心を大切に、明るい未来への希望と夢をもって生きてきたからこそ、命は尊いんだということ。

沖縄戦の戦没者の追悼と平和を祈る「平和の礎（いしじ）」。戦没者一人ひとりの名前が刻まれている。

海に面していて、そこから優しい風が吹くと崎原さんは語る。

私たちの命を生かしてくれる自然の恩恵に感謝するということが、「宝」という言葉に込められています。

そして、2つ目の言葉が「いちゃりばちょーでー」。出会えばみんなきょうだい、みんな家族だという意味です。そんな精神があったからこそ、資源に乏しい島国である琉球王国が、友好関係を大切にしながら国際貿易を行い、多彩な情報や文化を取り入れることができたのでしょう。また、薩摩藩の支配下に置かれていた時代でさえも、ポジティブな考え方で歩んできたからこそ、琉球空手や琉球舞踊などが花開き、世界に誇れる琉球文化を残してくれたのです。

私だけでなく、てぃーだ観光のスタッフが心がけていることは、言葉に魂を込めてお客様に向き合い、発信することです。その中の何人かでいいから、人として生きていくために大切なのは「肝心」なんだということを感じ取ってもらえればと思います。その方たちがそれを発信してくれれば、周りの方たちがまた感じ取ってさらに伝えてくれる。そうすれば、「肝心」の輪が広がり、平和的な心のあり方が広まっていくんです。昨今の国際情勢を見聞きすると、「またつらい思いを繰り返していくのか……。先人から学んできた『肝心』を大切にしなければ。」と感じます。

修学旅行生はどのような反応をしますか？

事前にある程度の知識を蓄えてから訪れてくれますが、実際に体感すると違いますね。「平和の礎」では、「皆さんが住んでいる場所を出身とする方々も眠っていらっしゃるんですよ。故郷に帰りたいのに帰れない、死にたくないのに死ななくてはならない、という無念の気持ちでいっぱいだったでしょう。でも、皆さんがここに来てくれたことで、私たちのために祈ってくれてありがとう、という気持ちになったと思います。数多くの魂が喜びを感じてくれている、その瞬間を忘れないでください。」というような話をします。すると、皆さんハッとするんです。また、「ひめゆりの塔」では、ひめゆり学徒の方々の戦争体験や、安心だと思っていたガマの中で泣き叫ぶ赤ちゃんの口を塞がなければならない状況なども話します。ガマの中の空気なんて入らなければわからないですよね。その場の空気を感じながら話を聞いてもらうこと、そこに足を運ぶことが大事なんです。そうすると、「ただ海がきれいだなと思っていたけれど、悲しくてつらいことを乗り越えて沖縄の人はこんなにも明るくたくましいんですね。」というような感想が返ってきます。

「ひめゆりの塔」は、ひめゆり学徒隊が隠れたガマ（伊原第三外科壕）のそばに建っている。

「ひめゆり平和祈念資料館」は、ひめゆり学徒隊の沖縄戦体験を伝えるミュージアム。

近年はネット社会で、さまざまな情報が入ってきます。そんな中でどれだけのことが伝わるのだろうかという不安もあります。でも、生きる環境が変わり、考え方が変わってきたとしても魂は変わりません。私たちが真心を込めて思いを伝えていけば必ず伝わると思っています。

これからの時代を担う子どもたちへメッセージをお願いします。

最近のことだけでなく、それぞれの時代にどんな心のあり方や考え方をしていたのかを勉強すれば、より豊かな感じ方ができるようになります。私自身、いろいろな人とつながって、話を聞いて、理解することで生き方が変わってきたと思っています。自分一人では磨かれてはいきません。周囲のたくさんの人の思いがあって、夢が実現していくのです。だからこそ、私たちも戦争体験の聞き取りを続けて継承していきたいですし、お客様に披露する空手の型はやらなくなると崩れてしまうので、もっと道場に通いたいとも考えています。

「自分はできない。」ではなく「まずはやってみよう。」という気持ちが未来を明るく変えていくのです。心のあり方、もち方次第で行動が変わるので、子どもたちにはぜひハッピーに生きてほしいですね。

沖縄本島最南端、喜屋武（きやん）岬のある糸満市は沖縄戦最後の激戦区。海岸一帯は沖縄戦跡国定公園に指定されている。

喜屋武岬に建立された慰霊碑「平和の塔」

「いーやーさーさー」「はーいーやー」
歌や踊りの際のかけ声、お囃子（はやし）。

「はいさい」
時間帯に関係なく交わす軽い挨拶。「やあ。」「こんにちは。」

「でぃーさい」
かけ声。
「さあ、皆さん一緒にやりましょう。」というような意味。

「てぃーだ」
太陽のことで、晴れの意味も。

日本文教出版『中学道徳　あすを生きる　1』には、ふるさとへの思いをテーマにした教材「『肝心』のバスガイド」を掲載しています。

特別寄稿

道徳科における ICTと道徳ノートの活用

東京都文京区立第九中学校主任教諭　戸上 理子

1 はじめに

現在、多くの学校では、GIGA スクール構想に沿って試行錯誤をしながら、ようやく１人１台端末が定着し、生徒も文房具のように使いこなすようになってきた。しかし、道徳科の授業において、既存の道徳ノートやワークシートと１人１台端末などの ICT をどのように併用し、道徳科の特質を踏まえた授業展開を行っていくかが、大きな課題となっている。

今回は、１人１台端末などの ICT 及び道徳ノートやワークシートの効果的な活用について、それぞれのよさを生かした授業実践を紹介する。

2 授業実践例

（1）授業の概要

・教材名：裏庭でのできごと
（『中学道徳　あすを生きる　1』日本文教出版）
・内容項目：Ａ「自主、自律、自由と責任」
・主題名：誠実な生き方
・ねらい：
何が正しく、何が誤りであるかを自ら判断し、自分の行動に責任をもち、誠実に生きようとする態度を育てる。

（2）導入

導入では、本授業の主題となる「誠実」という言葉について生徒がどのようなイメージもっているのか、事前に行ったアンケートの結果をスクリーンに映し、全体で共有した（図１）。

ICT を用いることで、多くの情報を瞬時に提示・共有でき、自分や友達の考えが表示されることで、授業における興味・関心が一層高まる。アンケート結果で出てきた生徒の言葉を拾いながら、「誠実に生きるとはどういうことなんだろう？」と本時の学習課題を生徒に問い、展開につなげた（道徳的価値への導入）。

事前アンケート結果

・真面目	・相手のことを考える	・前向き
・しっかりした性格	・正面から向き合う	・優しい
・失敗を認める	・正しいこと	・穏やか
・心がきれい	・正義を貫く	・素直
・うそをつかない（ごまかさない）	・正義感が強い	・正直
	・約束を守る	・純真／純白
・きちんとしている	・最後までやり遂げる	・礼儀正しい

図１　事前アンケート結果

（3）展開

ア　範読後の意見交流

本教材は登場人物が多く、言動もそれぞれ異なるため、範読後に「教材中で印象に残った場面は？」と問いながら、出てきた生徒の言葉をもとに、あらすじ整理を行った。各登場人物と、それを印象づけるできごとを図示して可視化することで、不確かだった生徒の教材理解が確かなものとなり、教材をきちんと理解したうえで授業を進めていくことが可能になる。

イ　役割演技の活用

基本発問では、雄一と大輔の間で葛藤する健二の心情を、実感を伴って理解させ、自分自身の問題として考えさせるために、「布団の上で悩む健二の気持ちを想像してみよう。」と役割演技を導入した。布団の上で悩む健二の状況をよりリアルに再現するために、背景画を用意し、その前に立つと布団の上で寝ているかのような臨場感が演出できる。本来、教具として模造紙で作成しなければならないような背景画も ICT であれば数分で準備でき、データは使い続けることができる。

ウ　中心発問における１人１台端末での意見交流

本授業では、話し合い活動サポートツール「AIAI モンキー」（アクティブブレインズ提供）を使い、中心発問についての自分の意見を１人１台端末で入力させ、全員の意見を個々の端末上で見ることができるようにした。このソフトでは、生徒の意見がキーワード化され、「わくわくの実」という形で図として表示される（図２）。数多く使用されたキーワードほど大きな円で提示され、キーワードをクリックすると関連する意見の一覧を見ることができるので、入力が済んだ生徒は「わくわくの実」をクリックし自由にほかの人の意見を確認することができる。なかなか意見を書けない生徒が、ほかの人の意見を参考にしながら自分の意見を入力することも可能となる。また、教師は生徒が入力している間に、ねらいに迫るため意図的に生徒の意見を拾い上げておく。

図２　わくわくの実

全員が入力した後は、小集団での話し合いを行う。「わくわくの実」を見て共感できる意見や気になった意見、新たな発見があった意見を取り上げ、なぜその意見を取り上げたのかを説明し、その考えについて話し合うことで、ねらいについて深めていく。

小集団での話し合いの後は、出てきた意見をそれぞれ発表させ、教師も「わくわくの実」で拾い上げた意見を「これはどういうことだろう？」「これについて教えてくれるかな？」と問いかけながら問い返しの発問を行い、学級全体でねらいに迫っていく。

（4）終末

終末では、道徳ノートを活用する。最後に今までの学習を振り返り、ほかの人との話し合いを通してあらためて考えたことや新たに気づいたこと、さらに疑問に感じたことなどを、生徒自身が自己調整を図りながら道徳ノートに記入していく。個人でじっくりとねらいについて内省・熟慮する時間を設けることで、ねらいとする道徳的価値が生徒自身のものになる。

１人１台端末での入力でもよいが、道徳ノートであれば、これまでの授業の積み重ねや、授業ごとの自分自身の考えの変遷を一目で見ることができ、蓄積の過程が見える。また、いつでもすぐに見返せるので、授業で考えたことを家庭で振り返ることも可能となる。

3 ICT 活用の成果と課題

（1）成果

・１人１台端末等の ICT を活用することで、導入や中心発問において瞬時に意見を共有し、全員の意見を確認することができ、今まで以上に多様な意見から考えることができる。
・教師も端末上で全員の意見を見ることができるため、あらかじめどの生徒にどのように問い返して授業を深めていくかを、意図的・計画的に展開することができる。
・書くことが苦手な生徒も、１人１台端末上でキーボード入力をしたり、描画機能で描いたりと、書くことへの負担が少なくなる。

（2）課題

・１人１台端末を使って画面上で意見を見合うことだけに終始してしまうことがある。
・１人１台端末で入力した意見をどのように蓄積すれば、記録としていつでも見返すことができるようになるか。
・キーボードや描画機能でも書くことが苦手な生徒に対し、どのような支援を行っていくか。

4 最後に

課題の解決については、今回の授業でも行ったように、画面を見るばかりで話し合いや深め合いがおろそかにならないよう、必ず１つ意見を取り上げ、理由とともに話し合いをし、深めていくことが大事である。

１人１台端末で入力した内容の集約という課題については、意見を Excel データでダウンロードし、個々の意見をワークシート化して、１枚のプリントで印刷できるようにする。また、全員の意見も印刷し、それを道徳ノートに貼ることで、いつでも振り返ることができるようにしていくなどの方法も考えられる。

また、入力が苦手な生徒は音声認識機能を使って入力させるなど、今後はより一層ユニバーサルデザインの視点に立った道徳科の授業を心がけていきたい。

第23回 見てわかる！道徳

道徳の学習における応用編です。基本となる22の内容項目は、それぞれ独立しているわけではありません。
それらは密接に関わり合い、また競合する場合もあります。
ここでは、内容項目間の関係をわかりやすく解説し、道徳的価値の本質やおもしろさに迫ります。

今回のテーマ

「真理の探究」（小学校）
「真理の探究、創造」（中学校）
「勤労」（中学校）

監修：広島大学名誉教授　越智 貢
共著：福山平成大学教授　上村 崇
北海道教育大学准教授　奥田 秀巳

社会生活と勤労

私たちの社会は、働く人々によって支えられています。ひとたび街に出れば、店員や警備員、駅員や会社員などさまざまな職種の人に出会います。無論、こうした目に見える人たちだけが社会を支えているわけではありません。道路やそこを走る自転車やバスなどが機能するためには、それらを設計した人々、それらの材料を運んだ人々、そしてそれらを作った人々が必要です。さらに、それらを毎日安全に利用できるよう維持・管理している人々も、大抵は目に見えません。こうして、働く人々がそれぞれの場所でそれぞれの職分を果たし、勤労に励むことで、初めて私たちの社会生活は成り立っているのです。

勤労の変化

ただし、「勤労に励む」といっても、その励み方はさまざまです。しかも、絶えず変化しています。

周知のように、近年、大きな変化をもたらしているのはテクノロジーの進歩です。かつて長い間遠方の人との通信は文書のやりとりによって行われていましたが、その後電話やファックスを経て、今や電子メールや SNS が当たり前になっています。オンライン会議や出勤せず在宅で働くリモートワークが可能になったのも、テクノロジーのおかげです。しかし、こうした働き方さえ、近い将来、AI（人工知能）の活用によって変わっていくとの予測がささやかれています。

変化をもたらしたのはテクノロジーだけではありません。女性の社会進出等を受けて男女共同参画社会の実現がめざされる中で、勤労と私生活との調和を図ること、すなわちワーク・ライフ・バランスの考え方も重視されるようになりました。このように、私たちの勤労の形は、30 年前とは比較にならないほどの変貌ぶりを示しています。

テクノロジーの開発やワーク・ライフ・バランスの主張が、ともに何らかの歴史的問題を解決・解消するものとして登場したことは見逃せません。それらは、より速いコミュニケーションの方法やより簡便に勤務する方法、そしてより強く幸福に結びつく働き方などについて問い続けたからこそ得られた回答です。とすれば、これらは真理を探究した成果だといっても過言ではないでしょう。

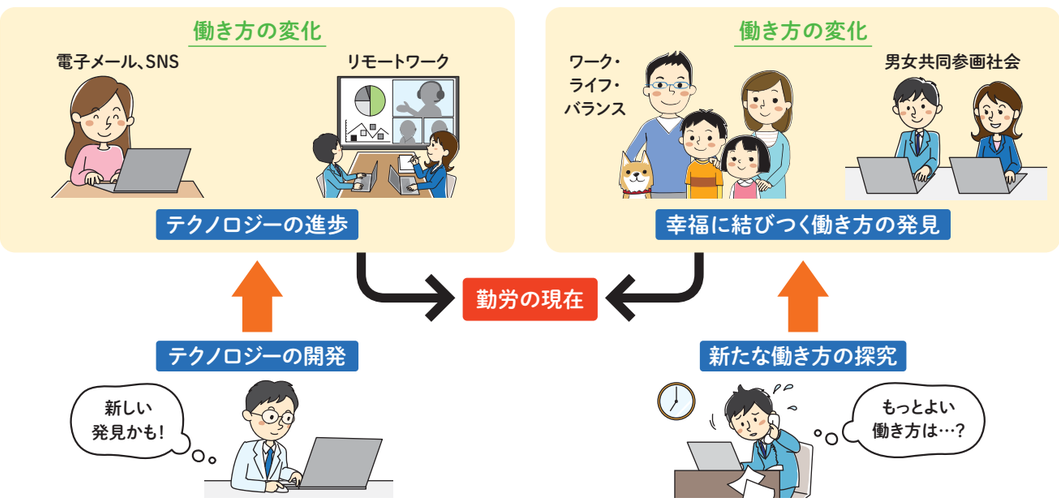


図１：勤労とその変化

真理の探究に「努める」こと

真理の探究という言葉を聞けば、自分はそんな大層なことを考えてはいない、真理など自分には無関係の高尚なことだと反論する人がいるかもしれません。確かに、科学者や研究者でもない限り、日々、真理の探究に勤しんでいる人はまれでしょう。しかし、真理を探究しようとする「心」をもち、新しいものを生み出そうと「努める」こと（学習指導要領より）は、小学生や中学生はもちろん、誰にとっても重要です。なぜなら、それは何か問題が生じたときに仕方がないと諦めるのではなく、問題を解決するために、何らかの手立てを模索することを意味しているからです。

もっとよい解決法があるのではないか、例えば、もっとよい筆記用具があるのではないか、もっとよい農業生産が考えられるのではないか、といった問いの結果として、シャープペンシルやボールペンが生まれ、農具や品種改良の方法が生まれたのです。私たちの社会が、あらゆる領域でこれらの「もっとよい」を探求してきた歴史的成果であることを忘れるべきではありません。

真理の探究と公共の精神

確かに、それらの解決法は不変の真理ではないかもしれません。しかし、それまでの問題点を解消するいわば暫定的な真理だということはできるでしょう。それらにさらなる修正や改善が加えられ、私たちの社会がますます発展するためには、誰もが真理を探究しようとする「心」をもち、新しいものを生み出そうと「努める」ことが欠かせません。

このように、「もっとよいもの」の発見や発明が「もっとよい社会」の実現につながっていること、つまり真理探究の心が社会全体の利益に関わっていることを看過すべきではありません。冒頭で述べたように、各人の勤労が社会を支えており、しかも勤労者たちが、直面する問題の新たな解決法を求めて日々努力しているとすれば、それぞれの努力は、たとえ社会への貢献を意識していなくても、すでに公共の精神に結びついているといってよいからです。

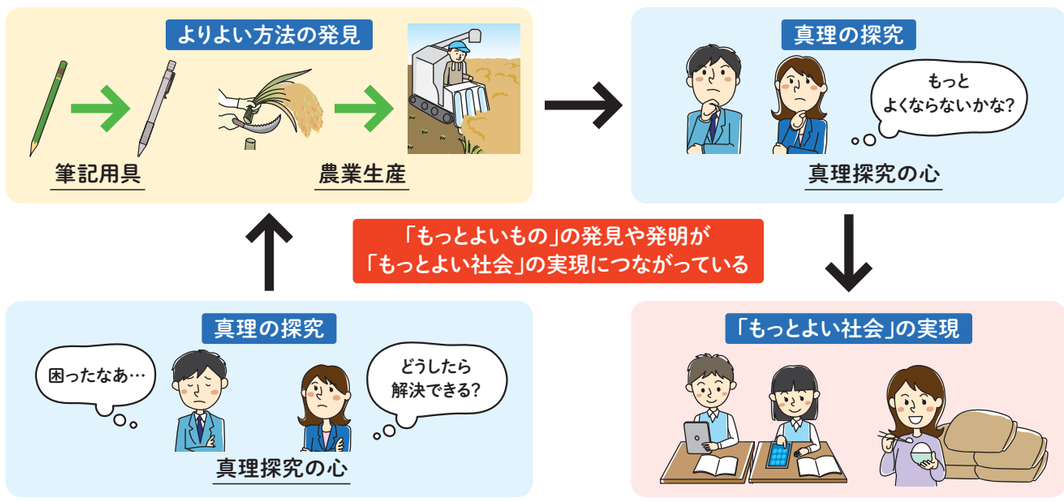


図２：真理探究の心と公共の精神

実践事例
中学校
2年

国際社会に生きる 日本人としての自覚を育てる

東京都立両国高等学校附属中学校主任教諭　磯 公啓

教材名　海と空―樫野の人々―（『中学校道徳　読み物資料集』文部科学省）

内容項目　C「国際理解、国際貢献」
世界の中の日本人としての自覚をもち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和と人類の発展に寄与すること。

主題名　国と国の絆（きずな）

ねらい　どの国の人々も同じ人間として尊重し、公正・公平に接することが、時代を越えた国同士の絆につながっていることに気づく学習を通して、国際社会に生きる日本人としての自覚をもち、国際貢献に努めようとする態度を育てる。

① はじめに

本校は、国際社会で活躍するリーダーの育成をめざし、国際理解教育や国際交流を進めている。附属中学校２年生では「大使館訪問」、３年生ではアメリカ合衆国ユタ州で「海外語学研修」などを行い、豊かな国際感覚の醸成をめざす。道徳科でも「国際理解、国際貢献」を重点項目に設定し、継続的・計画的な指導を行っている。こうした学習活動を通して、生徒は多様性の尊重や国際協調の大切さについておおむね理解している。

人が助け合いながら生きているように、国同士も相互扶助関係の中で生きている。我が国が、国際的な関わりをもつことなく孤立して存在することはできない。一方で、現実の国際情勢は複雑である。各国の利害や国益は対立し、世界の恒久平和は訪れていない。ロシアによるウクライナ侵攻をはじめとして、民族紛争や難民、テロ、貧困、地球規模の環境破壊など、国際社会が抱える諸課題は山積みである。我が国も他国と協力し、課題解決に取り組んでいかなければならない。

教育活動を通して、国際社会に生きる日本人としての自覚や主体的に国際貢献していこうとする意識を涵養（かんよう）し、世界の平和と人類の発展に貢献し、世界の人々から信頼される人間の育成をめざしていきたい。私は社会科を教えているが、カリキュラム・マネジメントを意識しながら、道徳科の授業実践を重ねている。

② 教材について

（1）教材のあらすじ

本教材は、実話をもとにしている。1985 年、イラン・イラク戦争の渦中、テヘランに取り残された在留日本人を、トルコ政府が危険を顧みず救出した。その背景には、日本とトルコとの間に結ばれた強い絆があった。1890 年、和歌山県沖にてトルコ軍艦「エルトゥールル号」が遭難した際に、現地の樫野（かしの）の人々は懸命に救助にあたり、69 人のトルコ人が無事帰国した。トルコの人々はエルトゥールル号遭難事故を語り継ぎ、日本に対する感謝を忘れなかったのである。

教材名「海と空」の「海」とはエルトゥールル号遭難事故での樫野の人々による献身的な救助活動、「空」とはイラン・イラク戦争の際のトルコ政府による日本人救出のことであり、両国の絆を表している。

（2）教材を通して考えさせたい道徳的価値

イラン・イラク戦争のとき、なぜトルコの航空機が来てくれたのか、当時の日本政府もマスコミもわからずにいた。後に駐日トルコ大使のネジアティ・ウトカン氏は、次のように語っている。

「エルトゥールル号の事故に際して、日本人がなしてくださった献身的な救助活動を、今もトルコの人たちは忘れていません。私も小学生の頃、歴史の教科書で学びました。トルコでは子どもたちでさえ、エルトゥールル号の事を知っています。今の日本人が知らないだけです。それで、テヘランで困っている日本人を助けようと、トルコ航空機※が飛んだのです。」（串本町 HP より）

樫野の人々の行動は、どの国の人々も同じ人間として尊重し合い、差別や偏見をもたずに公正・公平に接するという普遍的な道徳的価値によって支えられていた。彼らの思いは、時代を越えてトルコの人々の心に残り、95 年後の日本人救出につながったのである。

※　現在のターキッシュ エアラインズ。

私はこの話を大学生のときに知り、感銘を受けたと同時に、樫野の人々を誇らしく思った。また、国際社会に生きる日本人として、我が国と他国との間にどのような物語があるのかをもっと知りたくなった。生徒には、互いの国の歩みや交流の歴史を知り、同じ人間として真心をもって接することが、国と国の深い絆につながるということに気づかせたい。

③ 授業実践　（T：教師、S：生徒）

T アンケート「他国の人々と接するとき、どのようなことを意識するか。」の結果をいくつか紹介します。

アンケートのテキストマイニング

T 回答には、「その国の文化などを知らないで外国へ行くと失礼に当たってしまうことが多いので、文化や習慣を調べてから話す。」「日本のよいところを話せるようにする。」などがありました。今日は、他国の人や国同士のつながりについて考えていきましょう。

（→学習テーマ「国と国の絆」を提示。）

T 今日の教材は実際にあった話をもとにしています。

（→教材を範読。読みながら地図で場所を確認する。）

T 教材を読んだ感想を隣同士で話し合いましょう。

S1 関わりもない人なのに助けたのが印象的だった。

S2 95 年もたって恩返しをするなんてすごい。

T 時系列を確認しましょう。イラン・イラク戦争でテヘランに残された日本人をトルコが救ったのは、トルコがかつてのエルトゥールル号遭難事故の恩を忘れなかったからです。「私」は事故から何年もたってこのことを知りましたが、それでもなぜ日本人を助けたのか納得できませんでした。それはなぜでしょうか。

S3 エルトゥールル号遭難事故の顛末（てんまつ）を詳しく知らなかったから。他国の人を優先したのが疑問だった。

T 串本町には事故の顛末を知ることができる史料やお話が伝わっていました。樫野の人々が、食料をほとんど分け与えてまでエルトゥールル号の遭難者の救助にあたったのは、どのような思いがあったからでしょうか。

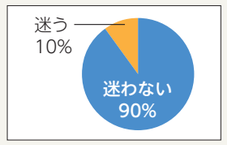
S4 全く知らない異国の人であっても同じ命なのだから、自分たちができる限りのことをしたいと思った。

T 非常用の食料もすべて与えた樫野の人々に、迷いはなかったのかな。心情メーターで表してみましょう。

S5 迷いはなかった。それが当たり前だと思っていた。

S6 自分たちの食料も限られているので迷いは多少あったかもしれないが、迷う時間がもったいない。

生徒 S5 の心情メーター



生徒 S6 の心情メーター

T 相手が誰であっても助けることは、当たり前なのでしょうか。

S7 当たり前ではない。

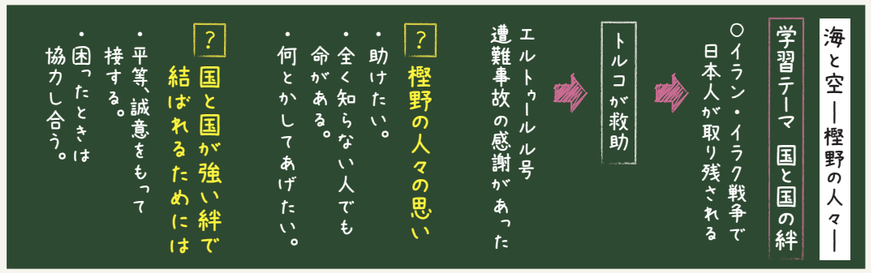
T イラン・イラク戦争でも、各国は自国民を優先していました。そう考えると、樫野の人々の行動は決して当たり前ではなかったのです。こうして、トルコと日本は強い絆で結ばれました。今日の教材において「海と空」は何を意味していますか。

畿央大学大学院教授
島 恒生 先生から

道徳教育は、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行います。道徳科だけでの指導では、教師が「教える」「伝える」授業になりがちです。

生徒は、あらゆる場面で道徳的な行為に関するさまざまな体験や経験をしています。中でも、本校では豊かな国際感覚の醸成に積極的に取り組んでいるため、生徒の心の中には、国際感覚に関わる、意識には至っていない見方、感じ方、考え方がリソースとして貯め込まれています。また、友達は自分と違う見方、感じ方、考え方をもっています。道徳科は「教える」のではなく、これらを自覚できるようプラス志向で進めることで、生徒の道徳性がしっかりと養われます。まさに、カリキュラム・マネジメントの有効性が発揮されるのです。

	学習活動（◎中心発問、○基本発問、・予想される生徒の反応）	補助発問、問い返し	◇指導上の留意点
導入	**1 アンケートで自身の体験を振り返る。** ○他国の人々と接するとき、どのようなことを意識するか。 ・相手の国や文化を受け入れ、理解しようとする。 ・ジェスチャーなどで自分の気持ちを何とかわかってもらおうとする。 **2 本時の課題を把握する。** 学習テーマ 国と国の絆		◇今年度行った大使館訪問や体験型英語学習施設での学びを振り返らせる。 ◇テキストマイニングを活用して意見を紹介する。
展開	**3 教材「海と空―樫野の人々―」を読み、考える。** ○「私」はなぜ、シンポジウムを聞きに行ったのだろう。 ・トルコ政府が日本人を救出してくれた理由がわからなかったから。 ○樫野の人々が、食料をほとんど分け与えてまでエルトゥールル号遭難者の救助にあたったのは、どのような思いがあったからだろうか。 ・今助けないと死んでしまうので、とにかく助けたい。 ・外国の人だろうと命は同じだ。	補助発問 「私」がシンポジウムを聞いても疑問が解消されなかったのはなぜだろうか。 ・ただ恩があるというだけで、危険を冒してまで他国の人を助けるとは思えないから。 問い返し 樫野の人々に、迷いはなかったか。 ・全くなかったのではないか。同じ人間を助けるのは当たり前だと考えていたのではないか。 ・多少あったかもしれないが、それでも人の命を大切にしたい。 問い返し 誰であっても助けることは、当たり前なのか。 ・今の感覚だと当たり前だけど、当時は違った。 ・イラン・イラク戦争のとき、ほかの国々は自国民しか助けなかったから、現代でも当たり前ではないのではないか。	◇範読後、簡単に時系列を確認する。 ◇迷いがあったと思うか、なかったと思うかを心情メーターで提示させる。 ◇1999年に起きたトルコ北西部の地震では日本の団体が義援金を送ったり、2011年の東日本大震災ではトルコからの救援隊の派遣があったりと、両国は国際的な相互扶助の関係にあることに触れる。 ◇個人で考えさせた後、グループで話し合わせ、発表させる。
	◎国と国が強い絆で結ばれるためには、どのような考え方が大切なのだろう。 ・日本と外国の歩みや歴史をしっかりと学ぶこと。 ・違いを認め合い尊重すること。 ・互いの国が大事にしている理想や価値観、国柄を理解し、尊重すること。 ○他国の人々と接するとき、意識することをあらためて考えよう。	補助発問 国同士には違いしかないのか。 ・同じ人間なのだから、どの国の人も大切にしている家族や郷土、国がある。	◇個人で考えさせた後、数人に発表させる。
終末	**4 本時を振り返る。** ○本時の学習を通して、新たな発見や考えたことはあったか。		◇授業を通してどのような考えの変容があったかを気づけるようにする。



S8 海はエルトゥールル号遭難事故、空はイラン・イラク戦争の中での日本とトルコの絆を表している。
T 日本とトルコのように、国と国が強い絆で結ばれるためには、どのような考え方が大切でしょうか。
S9 自国民も相手の国民も平等に大切にする。
S10 相手の国に対する尊敬の気持ちを忘れない。
S11 分け隔てなく誠意をもって接する気持ちが大切。
S12 互いに困ったときは協力し合える信頼関係。
T 国同士には、違いしかないのかな。
S13 他国の人でも同じ命がある。
T 例えば、自分が大切にしている家族や郷土は、どの国の人にもあります。ほかにも大切にしているものを考えてみてくださいね。
T では、初めの質問に戻ります。他国の人々と接するとき、意識することをあらためて考えてみましょう。
S14 違いを認め合うのもいいけれど、共通点を探すのもよいと思った。
S15 言葉以外のコミュニケーションも大事にしたい。
S16 他国の人でも同じ人間として思いやりをもつ。言葉が通じなくても、行動で示したい。
S17 その国の考え方、文化を尊重する。
T 今日の学習で新たに発見したことや今後生かしていきたいことを書きましょう。（以下、生徒記述を一部抜粋）

「トルコと日本がこんなに深い関係だということを初めて知った。130年も前からトルコと助け合いをしているのを見て、これからもよい関係を築いていきたいと思った。私も樫野の人々のように、自ら手を差し出せるような人になりたい。」
「日本とトルコは互いに地震が起きるたびに支援をしている。自分も何かをしてもらったことに対しては、必ず恩返しをするという気持ちを大切にしたい。」
「樫野の人々の思いやりのおかげで、そのとき困っていた人だけでなく、後世までお互いに困難があるときは支え合うという関係ができて、とても素晴らしいと思った。」

4 今後の課題と展望

生徒の発言や記述から、本時のねらい「どの国の人々も同じ人間として尊重し、公正・公平に接することが、時代を越えた国同士の絆につながっていることに気づく」はおおむね達成できたと思われる。しかし、「国際社会に生きる日本人としての自覚をもち、国際貢献に努めようとする」は深まりが足りなかったと感じる。生徒が「世界の中の日本人としての自覚」をもてるような発問の工夫が必要だったのではないだろうか。今後は、国際的視野に立って世界の平和と人類の発展に尽くした先人の教材開発を進め、国際社会に生きる日本人としての自覚を養い、世界平和に貢献する人材を育てたい。

さらに、道徳的価値と現代世界が抱える難民・移民問題等に関する政策とを拙速に結び付けないよう留意しながら、社会科や総合的な学習の時間で横断的に指導したい。

畿央大学大学院教授
島 恒生 先生から

生徒の「共通点を探すのもよいと思った。」「言葉以外のコミュニケーションも大事にしたい。」「他国の人でも同じ人間として……」などの意見は、C「国際理解、国際貢献」の内容として、例えば「地球家族」といわれるような、インクルーシブの考え方を自覚しようとしている表れのように感じます。

文化の違い、習慣の違い、考え方の違いを越え、同じ地球に住む私たち人間は、誰かが困っていたら、当たり前のように助け、助けられる関係にあるはずです。このような見方、感じ方、考え方をしっかりと自覚できるようにするとともに、その上に立って、今度は国際社会に生きる日本人としての自覚について、みんなで考えられるといいですね。

本時のようなドキュメントの教材は、事例の理解になってしまいがちですが、本実践のようにねらいをしっかりと意識し、深めていくことが大切です。

こんなコト、聞いてみました！

ちょっと聞いてみたいギモンに経験をもとにお答えいただきました。
授業のヒントになったり、励みになったり。
これからの道徳の授業に生かせる何かが見つかるかもしれません。

今回のテーマ

教材分析、どんなふうに進めていますか？

どう解く？ メンティでローテーション道徳

神奈川県相模原市立小山中学校教諭　三原 一朗

小山中学校では、メンター制度の「ローテーション道徳」を行っています。メンターと数名のメンティの職員で組み、教材分析を進めていくのが小山スタイルです。

道徳に苦手意識をもつ職員の助けになればというところがスタートで、そのためにローテーション道徳では、職員が苦手に思う内容項目の教材を扱っています（前年度にアンケートをとりました）。

一昨年、私のグループが扱ったのは、内容項目Ｃ「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」の教材です。登場人物の心情理解で終わらせないために、この教材にはどのような「道徳的な問題」が挙げられるだろうかと教材分析を進め、「東京一極集中」について考えさせようということになりました。

授業後の改善点の検討では、授業でどんな意見が出たか、発問や資料の順は適切だったかなど、生徒にとって「これからの生き方について考えを深められるか」という点に重点を置き、改善していきました。

同じグループのメンティの職員とローテーション道徳を振り返ったときに、「授業を複数回行うことで改善点が見えるようになった。その中で生徒の発言の生かし方や発問と発問のつなぎ方、授業の終着点を考えられるようになった。」と話してくれました。道徳の授業のたびに生き生きと「今回の授業ではこんな収穫があった。」と報告をしてくれるのは、ローテーション道徳の収穫の一つだと感じています。

小山スタイルのローテーション道徳はいかがでしょうか。

生徒も教員も対話する 道徳の授業づくり

神奈川県相模原市立小山中学校教諭　大内 芙美香

私は道徳が特別の教科となった年に初任者として本校に着任し、道徳の授業をどのように進めたらよいのか全くわからないまま１年目を過ごしました。そんな中、講師を迎えて行われた校内研修会や、「ローテーション道徳」の授業をグループで考える場での対話から学んだことについてお話ししようと思います。

研修会では、教材分析で物語のクライマックスを読み取り、その山場に向かって授業を構成していくことを学びました。「①主人公の気持ちの変容が見られる場面（中心発問を設定する場面）」「②変容のきっかけとなる場面」「③変容した結果」と物語を構図化することで、ポイントが整理しやすくなりました。

また、対話的な授業づくりという視点では、ローテーション道徳がよい刺激となりました。私のチームでは、内容項目Ｄ「自然愛護」の教材を用いました。「自然愛護」は、事前アンケートで多くの職員が苦手意識を感じていた内容項目でもあります。「自然を大切にするべき。」という聞こえのよい意見を言って終わりの授業にしないために、どういう発問をしたら生徒が自分ごととして考えるだろうかと意見を出し合い、授業を参観し合ったり、録画した授業をもとに協議したりする中で発問の検討を行いました。ほかの先生方と共に考えることで、一人では考えつかないアイデアが浮かび、苦手意識のある内容項目でも、自信をもって実践することができました。

私は教員５年目となった現在も、どのように授業を進めたら語り合う道徳ができるか課題を感じています。しかし、自分一人で考えていた道徳の授業をほかの先生方と対話しながら考えることで、授業のつくり方が見えてきたような気がしています。

地球の仲間からのメッセージ

獣医師、元大阪市天王寺動物園長
長瀬 健二郎

ナミチスイコウモリ

コウモリ

「コウモリ」と聞くと、ほとんどの人はあまりよい印象が浮かばないかと思います。暗闇や洞窟の中で音もなく大群で飛び交う、動物に気づかれないように近づいて血をなめる、飛ばないときは天井から静かに不気味にぶら下がる……。でもどの行動にもきちんとした合理的な理由があり、それを説明されると、「なるほど！」と感心していただけること間違いなしの興味深い動物なのです。

まず「音もなく」という点ですが、実は「音もなく」ではありません。頻繁に声を出しているのですが、それはヒトが聞くことができる 20 ～ 20,000Hz の音ではなく、それをはるかに超える 120,000Hz もの高い周波の声なのです。この高周波を使ってコミュニケーションをとったり、エサである虫から反響して返ってくる音を聞き取って虫の位置や移動の方向、そのスピードを知り、捕まえて食べたりしているのです。

また、血を吸うコウモリも確かにいます。ただ世界中にいるコウモリ約 1,300 種の中で、ヒトの血を吸うことが確認されているのは、主に中南米に生息するナミチスイコウモリという１種だけです。このコウモリはカミソリのようなとても鋭い前歯を持っていて、これで動物の皮膚を切り、流れ出す血をなめとるのですが、あまりに鋭利なので相手は切られたことに気づきません。そのうえコウモリの唾液の中には血を固まらせない成分が含まれているので、血をなめている間は固まることがありません。このようにして、栄養豊かで、きわめて消化のよい血液をエネルギー源としているのです。

アブラコウモリ

最後にぶら下がる理由ですが、これはコウモリが哺乳類で唯一飛べるようになった生物だからです。当然のことですが、飛ぶためにはできるだけ体を軽くする必要があります。本州から九州の街中にも住んでいるアブラコウモリはハツカネズミくらいの大きさですが、ハツカネズミの体重が 20g であるのに対し、アブラコウモリは６g ほどしかありません。この差は太ももを退化させたことによって作り出されたため、コウモリは歩くことができません。鳥は飛ぶとき太ももで反動をつけたりしますが、コウモリはそれもできません。だからぶら下がっているのです。こうすると、引っかけている足の指を離すだけで天井や枝から落下し、その勢いで飛べるのです。実に合理的ですね。

この拙文を読んで少しでもコウモリを見る目が変わっていただけたとすれば幸いです。

島先生と考える!! 道徳セミナーin大阪 開催報告

山口 賢 先生

島 恒生 先生

多田 義男 先生

2023 年 12 月 17 日（日）、大阪市内で道徳セミナーを対面限定で開催しました。
授業実践・授業解説 では、事前に講師の先生方が行った授業実践を動画で視聴。その後、動画を振り返りながら、先生方に授業のポイントについて解説いただきました。
講演 では、深い学びを実現するために、子どもたちのつぶやきや少数意見を大切にすること、中心発問でねらいを追求する重要性などについてお話しいただきました。

参加された先生方の声

- 実際の授業映像を拝見し、子どもたちがいきいきと授業に向かっている姿勢に感動しました。
- 小中ともご実践が素晴らしく、さらによくするための島先生の的確なご指導も本当に勉強になりました。
- 教え込むのではなく、子どもに手柄を取らせる道徳の授業は、普段の生活指導にもつながると感じました。
- 島先生の講演は、道徳の授業にまた明日から頑張って取り組もうと思える前向きな内容でよかったです。

プログラム

授業実践・授業解説 小学校
山口 賢 先生 京都教育大学附属京都小中学校教諭
6 年生「ブランコ乗りとピエロ」
【B「相互理解、寛容」】

授業実践・授業解説 中学校
多田 義男 先生 筑波大学附属中学校主幹教諭
3 年生「新しい夏のはじまり」
【A「向上心、個性の伸長」】

授業解説・講演
島 恒生 先生 畿央大学大学院教授
「深い学びを実現する道徳科の授業づくり」

どうとくのひろば 読者アンケートにご協力ください！
よりよい広報資料をお届けするため、先生のご感想、ご意見を左の二次元コードからぜひお聞かせください！

どうとくのひろば No. 36

日文教育資料［道徳］
令和 6 年（2024 年）1 月 31 日発行

編集・発行人　佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261
FAX：06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33708

日本文教出版株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261　FAX：06-6606-5171
東京本社　〒165-0026 東京都中野区新井 1-2-16
TEL：03-3389-4611　FAX：03-3389-4618
九州支社　〒810-0022 福岡市中央区薬院 3-11-14
TEL：092-531-7696　FAX：092-521-3938
東海支社　〒461-0004 名古屋市東区葵 1-13-18-7F·B
TEL：052-979-7260　FAX：052-979-7261
北海道出張所　〒001-0909 札幌市北区新琴似 9-12-1-1
TEL：011-764-1201　FAX：011-764-0690